

めくら草紙

太宰治

青空文庫

なんにも書くな。なんにも読むな。なんにも思うな。ただ、生きて在れ！

太古のすがた、そのままの蒼空^{あおぞら}。みんなも、この蒼空にだまされぬがいい。これほど人間に酷薄^{こくはく}なすがたがないのだ。おまえは、私に一箇の銅貨をさえ与えたことがなかった。おれは死ぬるともおまえを拝まぬ。齒をみがき、洗顔し、そのつぎに縁側の籐椅子^{とういす}に寝て、家人の洗濯の様をだまって見ていた。盥^{たらひ}の水が、庭のくろ土にこぼれ、流れる。音もなく這^はい流れるのだ。水到りて渠成^{きよ}る。このような小説があつたなら、千年万年たつても、生きて居る。人工の極致と私は呼ぶ。

鋭い眼をした主人公が、銀座へ出て片手あげて円タクを呼びとめるところから話がはじまり、しかもその主人公は高まいなる理想を持ち、その理想ゆえに艱難^{かんなん}辛苦^{しんく}をつぶさに嘗^なめ、その恥じるところなき阿修羅^{あしゅら}のすがたが、百千の読者の心に迫るのだ。そうして、その小説にはゆるぎなき首尾が完備してあつて、——私もまた、そのような、小説らしい

小説を書こうとしていた。私の中学時代からの一友人が、このごろ、洋装の細君をもらったのであるが、それは、狐きつねなのである。化けているのだ。私にはそれがよくわかつているのだけれども、どうも、可哀想で直接には言えないのだ。狐は、その友人を好いているのだもの。けだものに魅こまれた友人は、私の気のせいか、一日一日と痩やせてゆくようである。私は、そしらぬふりして首尾のまったく一貫した小説に仕立ててやり、その友人にそれとなく知らせてやったほうがよいのかもしれない。その友人は、「人生四十から。」という本を本棚にかざってあるのを私は見たことがあって、自分の生活を健康と名づけ、ご近所のものたちもまた、その友人を健康であると信じているようである。もし友人が、その小説を読み、「おれは君のあの小説のために救われた。」と言ったなら、私もまた、なかなか、ためになる小説を書いたということにならないだろうか。

けれども、もう、いやだ。水が、音もなく這い、伸びている様を、いま、この目で、見てしまったから、もう、山師は、いやだ。お小説。百篇の傑作を書いたところで、それが、私に於いて、なんだというのだ。（約三時間。）私は眠っていたのではないのだよ。そうだ。おまえの言葉を借りて言えば、私は、思いにしずんでいたのである。

私は、枕草紙の、ペエジを繰る。「心ときめきするもの。——雀ちこのこがひ。兎あそばす

る所の前わたりたる。よき薫物^{たきもの}たきて一人臥^ふしたる。唐鏡^{からのかがみ}の少しくらき見いでたる。云々。「私、自分の言葉を織つてみる。「目にはおぼろ、耳にもさだかならず、掌中^{きこく}に掬^くすれども、いつとはなしに指股のあひだよりこぼれ失せる様の、誰にも知られぬ秘めに秘めたる、むなしきもの。わざと三円の借錢をかへさざる。（われは貴族の子ゆへ。）ましろき女の裸身よこたはりたる。（生きものの、かなしみの象徴ゆへ。）わが面貌のたぐひなく、惜しくりりしく思はれたる。おまつり。」もう、よし。私が七つのときに、私の村の草競馬で優勝した得意満面の馬の顔を見た。私は、あれあれと指さして嘲^{あざけ}つた。それ以来、私の不仕合せがはじまつた。おまつりが好きなだけでも、死ぬるほど好きなだけけれども、私は風邪^{かぜ}をひいたといつわり、その日一日、部屋を薄暗くして寝るのである。

ああ、それで何枚になつた？（私はお隣のマツ子といふことし十六になる娘に、私の独白を筆記させていたのである。）マツ子は、人差し指の先を嘗^なめて、一枚二枚三枚四枚、それから、ひいふうみい三行です、と答えた。もう、いいのだ。ありがとう。マツ子から五枚の原稿用紙を受けとり、一枚に平均、三十箇くらいずつの誤字や仮名ちがいを、腹を立てずに、ていねいに直して行きながら、私は、たった五枚か、とげっそりしていた。むかし、江戸番町にお皿の数をかぞえるお菊という幽霊があつた。なんどかぞえてもかぞえ

ても、お皿の数が一枚だけ、たった一枚だけ、たりないのである。私には、その幽霊のくやしさが、身にしみてわかった。

こんどは、寝ながら、私ひとりで筆をとって書いてみた。

いま、私の寝ている籐椅子とういすのすぐちかくに坐つて、かたわらの机に軽くよりかかり「非

望」という文芸冊子を、あちこち覗のぞき読みしているこのお隣りの娘について少しだけ書く。

私がこの土地に移り住んだのは昭和十年の七月一日である。八月の中ごろ、私はお隣りの庭の、三本の夾竹桃きょうちくとうにふらふら心をひかれた。欲しいと思った。私は家人に言いつけて、どれでもいいから一本、ゆずつて下さるよう、お隣りへたのみに行かせた。家人は着物を着かえながら、お金は失礼ゆえ、そのうち私が東京へ出て袋物かなにかのお品を、と言つたが、私は、お金のほうがいいのだ、と言つて、二円、家人に手渡した。

家人がお隣りへ行つて来ての話に、お隣りの御主人は名古屋のほうの私設鉄道の駅長で、月にいちど家へかえるだけである。そうして、あとは奥さまとことし十六になる娘さんとふたりきりで、夾竹桃のことは、かえつて恐縮であつて、どれでもお気に召したものを、とおっしゃった。感じのいい奥さまです、ということである。あくる日、すぐ私は、このまちの植木屋を捜しだし、それをつれて、おとなりへお伺いした。つやつやした小造りの

顔の、四十歳くらいの婦人がでて来て挨拶した。少しふとって、愛想のよい口元をしていて、私にも、感じがよかった。三本のうち、まんなかの夾竹桃をゆずっていただくことにして、私は、お隣りの縁側に腰をかけ、話をした。たしかに次のようなことを言ったとおぼえている。

「くには、青森です。夾竹桃などめずらしいのです。私には、ま夏の花がいいようです。ねむ。さるすべり。あおい。百日紅。葵。日まわり。夾竹桃。蓮。はす。それから、鬼百合。夏菊。どくだみ。みんな好きです。ただ、木槿もくげだけは、きらいです。」

私は自分が浮き浮きとたくさんの花の名をかぞえあげたことに腹を立てていた。不覚だ！ それきり、ふつと一ことも口をきかなかった。帰りしなに、細君の背後にじつと坐っている小さな女の子へ、

「遊びにいらつしやい。」と言つてやった。娘は、「はあ。」と答えてそのまましずかに私のうしろについて来て、私の部屋へはいつて、坐つた。たしかに、そんな工合いであつたようである。私は、多少いい気持ちで夾竹桃などに心をひかれたのをくやくしく思つたので、その木の植えかた一さい家人にまかせ、八畳の居間でマツ子と話をした。私には、なんだか本の二三十ペエジ目あたりを読んでいるような、*at home*な、あたたかい気がし

て、私の姿勢をわすれて話をした。

あくる日マツ子は、私のうちの郵便箱に、四つに畳んだ西洋紙を投げこんでいた。眠れず、私はその朝、家人よりも早いくらいに寢床から脱けだし、齒をみがきながら、新聞を取りに出て、その紙きれを見つけたのだ。紙きれには、こう書いていた。

「あなたは尊いお人だ。死んではいけません。誰もごぞんじなのです。私はなんでもいたします。いつでも死にます。」

私は、朝ごはんのときに、家人へその紙きれを見せ、あれは、きつといい子だから、毎日あそびによこすよう、お隣りへおねがいして来い、と言いつけた。マツ子は、それから毎日、かかさず、私の家へ来た。

「マツ子は、いろが黒いから産婆さんにでもなればよい。」と或る日、私がほかのことで怒っていたときに、言つてやった。そんなに醜く黒くはないのだけれども、鼻もひくいし、美しい面貌ではない。ただ、唇の両端が伶俐れいりそうに上へめくれあがって、眼の黒く大きいのが取り柄である。姿態について、家人に問うと、「十六では、あれで大きいほうではないでしょうか。」と答えた。また、身なりについては、「いつでも、小ぎっぱりしているようじゃございませんか。奥さまが、しっかりしていますものですから。」と答えた。

私は、マツ子と話をして居れば、たまたま、時を忘れる。

「私、十八になれば、京都へいつて、お茶屋につとめるの。」

「そうか。もうきまつてあるのか。」

「お母さまのお知り合いで大きいお茶屋を、しているおかたがあるんですって。」お茶屋というのは、どうも、料亭のようであつた。父が駅長をしていても、そうしなければ、ならないのかなあ、そうかなあ、と断じて不服に思いながら、

「それでは女中じゃないか。」

「ええ。でも、——京都では、ゆいしよのあるご立派なお茶屋なんですって。」

「あそびに行つてやるか。」

「ぜひと。」ちからをいれていた。それから、遠いところを見ているような眼ざしで、ぼんやり^{つぶや}呟いた。「おひとりきりでおいでなさいね。」

「そのほうがいいのか。」

「うん。」袖^{そで}のはしをつまぐるのをやめて、うなずいた。「大勢さんだと、私の貯金が割合と早くなつてしまうから。」マツ子は私に、あそばせるつもりであつた。

「貯金がそんなにあるのか。」

「お母さまが、私に、保険をつけて下さっているの。私が三十二になれば、お金が何百円だか、たくさん取れるのよ。」

また、ある夜、私は、気の弱い女は父無児（ててなしご）を生むという言葉をふと思い出し、あんなに見えても、マツ子は、ひよつとしたら弱いんじゃないのかしらと気がかりになって、これは、ひとつ、マツ子に聞いてみようと思った。

「マツ子。おまえは、おまえのからだを大事と思っているか。」

マツ子は家人の手伝いをして、隣の六畳の部屋でほどこものをしていたのだが、しばらく、水を打ったように、ひっそりなった。やがて、

「ええ。」

と答えた。

「そうか、よし。」私は寝返りを打って、また眼をつぶった。安心したのである。

このあいだ、私は、マツ子のいるまえで、煮えたぎっている鉄びんを家人のほうにむけて投げつけた。家人は、私のびんぼうな一友人にこっそりお金を送ろうとして手紙を書いているのを、私は見つけ、ぶんを越えた仕儀はよせ、と言った。家人は、これは私のへそくりですから、と平気な顔で答えた。私は、かつとなり、「おまえの気のままになってた

まるか。」と言い、鉄びんを天井めがけて、力一ぱいに投げつけた。私はぐったりなって、籐椅子に寝ころび、マツ子を見た。マツ子は、鋏はさみをにぎって立っていた。私を刺すつもりであつたろうか。家人を刺すつもりであつたろうか。私は、いつでも刺されていいのだから、見て見ぬふりをしていたが、家人は知らなかったようである。

マツ子のことについて、これ以上、書くのは、いやだ。書きたくないのだ。私はこの子をいのちかけて大切にして居る。

マツ子は、もう私の傍にいないのである。私が、家へ、かえしたのである。日が暮れたから。

夜が来た。私は眠らなければならないのだ。これでまる三日三晩、私はどのような手段をつくしても眠れず、そのくせ、眠たくて、終日うつらうつらしているのだ。このようなときには、私よりも、家人のほうが、まいってしまつて、私のからだをお撫で下さい、きつと眠れると思います、と言つて声たてて泣いたことがある。私は、それを、試みたが、だめであつた。そのときの私の眼には、隣村の森ちかくの電燈の光が薊あざみの花に似ていたのを記憶して居る。

私は、いま、眠らなければいけない。けれども、書きかけた創作を、結ばなければいけ

ない。私は寢床の枕元に原稿用紙とBBBの鉛筆とを、そなえて寝た。

毎夜、毎夜、万^{ばん}朶の花のごとく、ひらひら私の眉^{みげん}間のあたりで舞い狂う、あの無量無数の言葉の洪水が、今宵は、また、なんとしたことか、雪のまったく降りやんでしまった空のように、ただ、からつとしていて、私ひとりのこされ、いつそ石になりたいくらいの差^し恥^{ゆうち}の念でいたずらに輾^{てんでん}転している。手も届かぬ遠くの空を飛んで居る水色の蝶を捕虫網で、やつとおさえて、二つ三つ、それはむなしい言葉であるのがわかっていながら、とにかく、掴^{つか}んだ。

夜の言葉。

「ダンテ、——ボオドレエル、——私。その線がふとい鋼鉄の直線のように思われた。その他は誰もない。」「死して、なおすすむ。」「長生をするために生きて居る。」「蹉^{さてつ}跌の美。」「Factだけを言う。私が夜に戸外を歩きまわると、からだにわるいのが痛快にからだにこたえて、よくわかるのだ。竹のステッキ。（近所のものはムチと呼んでいるのを、おれは知^なって居る。）これがないと、散歩の興味、半減。かならず、電柱を突き、樹木の幹^{なぐ}を殴りつけ、足もとの草を薙^なぎ倒す。すぐ漁師まち。もう寝しずまっている。朝はやいのだから。泥の海。下駄^{げた}のまま海にはいる。歯がみをして居る。死ぬことだけを考^{かん}えてる。

男ありて大声叱咤、（だらしがねえぞ。しっかりしろ！）私つぶやいて曰く、（君は、もつとだらしがなくて、心配だ。）船橋のまちには犬がうようよ居やがる。一匹一匹、私に吠える。芸者が黒い人力車に乗って私を追い越す。うすい幌ほろの中でふりかえる。八月の末、よく観ると、いいのね、と皮膚のきたない芸者ふたりが私の噂をしていたと家人が銭湯で聞いて来て、（二十七八の芸者衆にきつと好かれる顔です。こんど、くにお兄さまにお願いして、おめかけさんでもお置きになったら？ ほんとうに。）と鏡台のまえに坐り、おしろいを、薄くつけながら言った。（もう一年、否、もう半年はやかったなら！）軒のひくい家の柱時計。それがぼんぼん鳴りはじめた。私は不具の左脚をひきずって走る。否、この男は逃げたのだ。精米屋せいまいやは骨折り、かせいで居る。全身を米の粉でまっしろにして、かれの妻と三人のおとこの鼻たれのために、帯と、めんこのために、努めて居る。私、（おれだって、いま、こう見えていても、げんざい精出して居るじゃないか。肩身のせまい思い、無し。）精米の機械の音。「佐藤春夫曰く、悪趣味の極端。したがってここでは、誇張されたるものの美が、もくろまれて居る。」——「文士相軽。文士相重。ゆきつ、戻りつ。——ねむり葉の精緻せいちなる秤器はかり。無表情の看護婦があらあらしく秤器をうごかす。」

始発の電車。

夜が明け、明け放れていっても、私には起きあがることができないのだ。このように、工合のわるい朝には、家人に言いつけて、コップにすこし、お酒を持って来させる。もう起きて歯をみがかなければいけないという思いは、これは、しらじらしくて、かなしいものだ。そんなとき子供は、「おめぎ。」を要求する。私にとっては、げんしゆく厳 肅なるお酒を、な嘗めながら、私は、庭を眺めて、しぶい眼を見はった。庭のまんなかに、一坪くらいの扇型の花壇ができて在るのだ。そろそろと秋冷、身にたえがたくなって来たころ、「庭だけでも、にぎやかにしよう。」といつか私が一言、家人のいるまえて呟いたことのあるのを思い出した。二十種にちかき草花の球根が、けさ、私の寝ている間に植えられ、しかも、その扇型の花壇には、草花の名まえを書いたボール紙の白い札がまぶしいくらいに林立しているのである。

「ドイツ鈴蘭。すずらん」 「イチハツ。」 「クライミングローズフワバー。」 「君子蘭。」 「ホ

ワイトアマリリス。」 「西洋錦風。」 「流星蘭。」 「長太郎百合。」 「ヒヤシンスグラウンドメーメー。」 「リュウモンシス。」 「鹿の子百合。」 「長生蘭。」 「ミスアンラアス。」

「電光種バラ。」 「四季咲ぼたん。」 「ミセスワン種チュウリップ。」 「西洋しゃくやく雪の越。」 「黒竜ぼたん。」 —— 私は、いちいち、枕元の原稿用紙に書きしるす。涙が出

た。涙は頬を伝い、はだかの胸にまで這い流れる。生れて、はじめての醜をさらす。扇型の花壇。そうして、ヒヤシンスグランドメーメー。ざまを見る。もう、とりかえしがつかないのだ。この花壇を眺める者すべて、私の胸の中の秘めに秘めたる田舎くさい鈍重を見つけてしまうにきまつて居る。扇型。扇型。ああ、この鼻のさきに突きつけられた、どうしようもないほど私に似ている残虐無道のポンチ画。

お隣りのマツ子は、この小説を読み、もはや私の家へ来ないだろう。私はマツ子に傷をつけたのだから。涙はそのゆえにもまた、こんなに、あとからあとから湧いて出るのか。

否とよ。扇型、われに何かせむ。マツ子も要らぬ。私は、この小説を当然の存在にまで漕ぎつけるため、泣いたのだ。私は、死ぬるとも、巧言令色こうげんれいしよくであらねばならぬ。鉄の原則。

いま、読者と別れるに当り、この十八枚の小説に於いて十指にあまる自然の草木の名称を挙げながら、私、それらの姿態について、心にもなきふやけた描写を一行、否、一句だにしなかったことを、高い誇りを以って言い得る。さらば、行け！

「この水や、君の器うつわにしたがうだろう。」

青空文庫情報

底本：「太宰治全集」ちくま文庫、筑摩書房

1988（昭和63）年8月30日第1刷発行

底本の親本：筑摩全集類聚版太宰治全集 筑摩書房

1975（昭和50）年6月～1976（昭和51）年6月

入力：柴田卓治

校正：鈴木伸吾

1999年8月1日公開

2004年3月4日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

めくら草紙

太宰治

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>